

国内経済情勢

概 観

輸出が高水準を続ける一方、国内最終需要も回復傾向をたどっており、これらを背景に鉱工業生産は引続きかなりの増加となったが、出荷は2ヵ月著増の反動から減少し、製品在庫の減勢は一服となった。

この間、商品市況はこれまでの騰勢が鈍り、卸売物価の上昇率もやや鈍化した。また消費者物価は前月急騰した季節商品の反落から下落した。

金融面では、企業金融の緩和が進む一方、銀行券の伸び率は引続き高まった。

4月の国際収支は、貿易収支の黒字幅が縮小したものの、長期資本収支の好転もあって総合収支では引続き黒字となった。

生産は増勢持続、出荷は反動減

・4月の鉱工業生産(季節調整済み、速報)は、前月比+2.2%と、5ヵ月連続して増加した(前年同月比+15.1%)。業種別にみると、繊維、セメントが減少したほかは乗用車をはじめほぼ軒並み増加となった。

鉱工業出荷(季節調整済み、速報)は、前2ヵ月著増のあと、前月比-2.1%と3ヵ月ぶりにかなり減少した(前年同月比+10.6%)が、これには前月著増をみた船舶の落込みが大きく響いている(船舶を除けば-0.8%の減少)。品目別には農業用機械、金属製品(アルミサッシ等)が増加した反

面、乗用車、家電製品の一部が前月までの著伸の反動から減少を示し、セメント、通信機械も年度替りに伴う官公需の一服から伸び悩みとなった。

この間、生産者製品在庫(季節調整済み、速報)は、非鉄、繊維等が減少した反面、家電製品、乗用車が増加したため前月比横ばいとなり、生産者製品在庫率(45年=100)は124.0と前月(121.4)に比べわずかながら上昇した。

5月時点調査の日本銀行「主要企業短期経済観測」によれば、製品在庫水準や製品需給についての企業の判断はかなりの改善をみ、これまで根強く続いてきた生産設備、雇用についての過剰感もようやく減退傾向に転じた。

4月の設備投資関連指標の動きをみると、一般資本財出荷(季節調整済み、速報)は、圧延機械、電動機等の伸びから前月比+1.5%と増加した。機械受注額(船舶を除く民需、季節調整済み)は、4ヵ月連続増加のあと、4月は電力の反動減から前月比-23.5%の減少となった。

一方、建設工事受注額(民間産業分、季節調整済み、速報)は、期明けによる落込みが大きく、前月比-22.3%とかなりの減少となった。

前記「主要企業短期経済観測」によると、主要企業製造業の51年度設備投資計画は前年度比+7.2%の増加となっている一方、非製造業は電力の著増を主因に前年度比+32.0%の大幅増加が見込まれている。

また同調査による50年度下期の企業収益(経常利益)は、製造業で前期比171.3%の大幅増益とな

り、売上高経常利益率も前期の0.76%から1.96%にまで回復した。なお非製造業の増益幅も16.4%と前回予測を上回った。

4月の全国百貨店売上高(季節調整済み)は、前月減少のあと、衣料品の持直しを主因に前月比+1.1%と増加した。一方、乗用車新車登録台数(季節調整済み)は、5月も一服状況を続けた(前月比-14.9%)。

4月の労働関係指標の動きをみると、有効求人倍率(季節調整済み)は4ヵ月連続上昇のあと当月は0.68倍と前月比横ばいとなった。この間、所定外労働時間は6ヵ月ぶりに小幅減少を示したが、高水準を続けている(前年同月比+13.5%)。

商況は上げ一服

5月の商品市況は、鋼板、鉛などが上伸したものの、そ毛糸、銅が反落し、糸鋼類、セメントも軟弱地合いを続けるなど、上げ一服商状となった。輸出の高水準等を背景に需給の基調は引続き底堅いが、梅雨期接近や官公需の伸び悩みから一部の商品については荷動きがやや鈍った。

5月の卸売物価は、繊維、鉄鋼の一部が値上りした反面、パルプ・紙等が値下りしたため、前月比+0.4%と前月に比べ上昇率がやや鈍化した(前年同月比+5.3%)。

5月の消費者物価(東京)は、前月高騰した野菜が急反落を示したため、衣料品の値上りにもかかわらず、前月比-0.3%と、5ヵ月ぶりに下落した(前年同月比+8.5%)。

企業金融は引続き緩和

5月の金融市場をみると、銀行券は2,838億円の還収超と前年(同5,113億円)を下回った反面、財政資金は、予算成立に伴う諸払の進捗などから、多額の国債発行にもかかわらず879億円の払

超(前年揚超1,014億円)となった。この結果、その他勘定を合わせた月中の資金余剰額は3,924億円とほぼ前年(3,794億円)並みとなり、日本銀行は主として貸出回収と手形の売オペレーションによってこれを調整した。

この間、コール、手形売買市場は通月平穩裡に推移し、コール・レート、手形売買レートとも変わらなかった(月末コール無条件もの出し手レート6.75%、手形買い手レート7.25%)。なお更月後の6月2日には資金需給ひっ迫期入りから手形売買レートは0.25%上昇した。

5月の銀行券平均発行高は引続き着実な伸びを示し、前年比伸び率は+12.2%と前月(+11.5%)を上回った。一方4月のマネーサプライ(M₂平残)は、預金通貨の伸び悩みから前年同月比+15.2%(前月+15.7%)と久方ぶりに増勢鈍化をみた。

4月の全国銀行貸出は、月中1,532億円減と前年(1,353億円減)をやや上回る減少となり、月末残高の前年比伸び率は+11.7%と前月比横ばいとなった。

企業の資金需要をみると、流通関係の設備資金や住宅、消費関連企業の増加運転資金に動意がみられるものの、総じてみれば、在庫調整の進捗、輸出の好調持続等を背景として鎮静傾向を続けている。これに対し金融機関の融資態度は弾力的であり、企業の資金繰りは一段と緩和している。

4月の全国銀行貸出約定平均金利は月中0.021%低下し、昨年4月以降の通算低下幅は1.126%(公定歩合に対する追従率45.0%、短期金利のみでは75.6%)となった。

5月の公社債市況は、都市銀行筋の売り意欲がやや強まった一方、農林系統機関、信用金庫等が慎重な買入れ態度を持続したため、弱含みに推移

した。一方株式市況は物色人氣が根強かったものの、海外株価弱含みの影響もあり、月中もみ合い商状で推移し、旧ダウ 4,659 円で越月した(前月末 4,656 円)。更月後は騰勢がやや強まり、旧ダウは 2 年ぶりに 4,700 円台に乗せた。

総合収支は 3 か月連続の黒字

4 月の国際収支は、貿易収支が黒字幅を縮小したものの、なおかなりの黒字となり、長期資本収支も対日証券投資の流入等から再び流入超となったため、総合収支では 181 百万ドルの黒字と 3 か月連続して黒字を計上した。

4 月の輸出(通関ベース、季節調整済み)は、4 か月連続増加のあと、前月比 -7.0%と減少した。これは前月に決算月の影響や定期船運賃引上げ見越しから大幅な積急ぎがみられたことの反動による面が大きく、水準としては引続き前年をかなり上回っている。品目別にみると、前月に引渡しの集中した船舶が大きく落込み、化学肥料も減少し

たが、鉄鋼、弱電製品が増加し、自動車も高水準を維持した。地域別には、西欧向け、中近東向けが増加したものの、米国向け、中南米向けは前月著増のあと減少した。

他方 4 月の輸入(通関ベース、季節調整済み)は、前月比 +1.7%と小幅増加を示した。これは前月減少した原油が当月入着集中をみたためであり、これを除けば大勢として落着いた動きを示している。

5 月のインターバンク米ドル直物中心相場は、月初造船代金等大口資金の流入から軟化したあと、海外における米ドル高の影響等から堅調に転じ、結局 299 円 95 銭で越月した(前月末 299 円 40 銭)。

5 月の外貨準備高は月中 273 百万ドルの増加を示し、月末残高は 15,210 百万ドルとなった。

(昭和 51 年 6 月 11 日)